

台湾先住民の連杯

酒造・飲酒の研究史と日本国内所在資料の関係性を中心として

角南聡一郎(財団法人元興寺文化財研究所)

本研究は、連杯という酒器を通じて、日本植民地時代から現在に至る台湾先住民(台湾では原住民と表記)の酒造、飲酒に用いられた物質文化についての研究史と、日本所在資料の来歴の関係について検討する。一見無関係な二つの問題を検討するのは、研究者による成果などにより、台湾先住民に特徴的である連杯や、独特の飲酒形態に注目が集まり、連杯もコレクターによる収集の対象になり、この影響下に日本には多くの台湾先住民関連のモノが収蔵されたと考えられるからだ。

連杯とは、パイワン・ルカイ・ピュマの間で用いられてきた、日本の枡ばかりのような形の器が連結したような形の酒器のことである(野林 2007)。

台湾原住民の酒関連用具研究は、日本植民地時代(1895~1945)に開始された。台湾領有直後の1896年・1897年・1898年・1900年の四回の台湾調査をおこなった鳥居龍蔵は、先住民の物質文化に関心を抱き、多くの資料を収集し日本に持ち帰った。鳥居は日本の学術調査ではじめて写真機を使用したことで知られるが、東京大学に残された乾板写真の中には、「蕃刀をつけた人と百歩蛇、連杯、壺のデザインをしたパイワン族の彫刻」が含まれている(東京大学総合研究博物館「東アジア・ミクロネシア古写真資料画像 データベース」<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>)。

また伊能嘉矩と粟野伝之丞は、「アタイヤル、ヴオヌム、ツオオ、ツアリセン、スパヨワン、プ ユマ、アミス、及びペイボの八部族」について、いずれも咀嚼法や素醸法により酒を造り飲酒することを明らかにした(伊能・粟野 1900)。特にツアリセン族(現在のルカイ族・パイワン族)は、「表 好意ノ方法トシテ二人同飲ヲ為ス其法二個ノ杓ヲ連接セル如キ長形ノ飲器ヲ把リ二人並立シテ同時ニ各個ノ杯ノ中ノ酒ヲ飲ムモノトス」として、連杯の存在がはじめて紹介された。続いて、伊能はパイワン族の儀式的飲酒の際に、「一種の連続盃」を使用することを図示しながら報告した(伊能 1908)。

1913~1922年の間に臨時台日慣調査会によって編纂された、『蕃族慣習調査報告書』や『蕃族調査報告書』にも、物質文化に重きを置いた酒造や飲酒についての報告が見られる。これとは別に、この頃植物学者や醸造学者によって、先住民の酒造についての研究が推進されたことも忘れてはならない。このように調査研究が進展する中で、日本人にとっては連杯と、一つの器で同時に二人が飲むという飲み方のセットに関心が向いていった。それは、日本や漢民族とは異なった酒器や飲み方に対する、興味関心からであったと考えられる。その注目の高さは、土産用の絵葉書にも連杯やの飲み方が登場するようになったことから明らかである。いつしか連杯は、台湾先住民を表象するアイテムの一つとなっていったのである。

戦後、陳奇禄によるパイワン族の物質文化研究でも、連杯は先住民の中心的資料の一つとして扱われていった(陳 1961)。このことは、日本植民地時代に形成された先住民を表象する物質文化のカテゴリーが、戦後も台湾人研究者によって引き継がれていったことを意味している。それを受けて、現在の台湾でもパイワン族などが自文化を語る際に連杯が引き合いに出されたり、デザインされたりするというように、実生活では用いられなくなった連杯という酒器が、象徴的に活用されている場合が見られる。そのような意味では、日本植民地時代の研究成果が、現在の先住民の語りへと流用されているとも解釈できる。

以上のように研究史を紐解くことにより、日本国内の資料がどのような来歴で日本にももたらされたかがわかる。東京国立博物館や国立民族学博物館などといった戦前に収集された資料がある一方で、戦後には松本民芸館のような個人の収集家によるコレクション中にも、パイワン族の連杯が収蔵されている。このことは、研究者によって研究資料として日本に持ち帰られたものだけでなく、コレクターにより収集された資料が多くあったことが予想される。連杯にとどまらず、日本国内に所在する台湾先住民関連資料の所在を明確化する必要があるだろう。こうした基本情報のデータベース化は、日本だけでなく台湾など国外の研究者に提供でき、資料の学術的価値も定まるであろう。日本国内の文化資源としての博物館資料を活用するという意味で、このような基礎的研究の実施は重要ではないかと考える。

なお本研究には、平成21年度(財)たばこ総合研究センター研究助成「台湾原住民嗜好品関係物質文化の基礎的研究」による成果の一部を含んでいる。

【物質文化、台湾、先住民、学史、コレクション】